



## 遙かなる樺太

美幌医師会  
美幌町立国民健康保険病院

松井寛輔

とうとう

滔々と流れる網走川の川面には太陽の光がきらめき、その眩しさに思わず目を細める。5月の末、北の海辺の町「網走」によく訪れた春の陽気に川辺の草も背伸びする。しかし、気温は10度、風もまだ冷たい。私はベンチに腰を下ろし眼前に広がる川の流れをぼんやりと眺めていた。阿寒山系を源とする網走川は美幌町を貫流し網走湖に入る。網走湖から北流した水は大きく東へと向きを変えオホーツク海へ注ぐ。その河口近くの北岸に私はいた。すぐ後ろの丘にはモダンな外観の「モヨロ貝塚館」が網走川を見下ろすように建っている。

この日、私がこの貝塚館を見学を訪れたのは、山本博文監修の『あなたの知らない北海道の歴史』を読み、オホーツク地域と樺太との関係を知りたかったからだ。本書によると、「モヨロ貝塚」の発掘で出たアイヌの人骨のそのさらに下の層から「オホーツク人」の人骨が発見されたという。「オホーツク人」とは、5～13世紀にこの地で「オホーツク文化」を繁栄させた人たちのことをいう。その人種の由来は、樺太少数民族のニヴフ人とする説が有力である。すなわち、かつてオホーツク地域には樺太の人が住んでいたのだ。

私がなぜ樺太に興味を持つようになったのか。それは、2年前、ひとりの認知症患者（A氏）を担当したことに始まる。A氏はプリオン蛋白遺伝子に変異を認めるタイプだった。A氏の兄弟3人は生前に遺伝子検査を受けていないものの、そのうち2人は認知症だった。A氏の奥さんから聞いた話では、A氏とその兄弟は生まれも育ちも樺太で、終戦前に美幌町に移住して来たという。九州で勤務していた私は、終戦時に「満州」から戻って来た人に会ったことはあるものの、「樺太」から移住して来た人に会ったのは初めてだった。この時から私は「樺太」を身近に感じるようになった。

そこで、樺太と日本の歴史を紐解いてみた。1809年、間宮林蔵は樺太が島であることを発見。当時の記録によると、樺太は南部にアイヌ人、それより北はニヴフ人、ウィルタ人、山丹人などの北方少数民族が暮らしていたようだ。江戸時代の安政元年（1855年）に日露和親条約が結ばれ、樺太では日本人とロシア人が混在して生活していた。ところが、1875年、明治政府代表として榎本武揚が千島・樺太交換条約

を結び、樺太はロシアのものとなった。しかし、日露戦争終結時の1905年、明治政府は小村寿太郎を全権大使とし、ロシアとの間にポーツマス条約を締結させ、これにより樺太北緯50度以南は再び日本の領土となる。以後、南樺太では日本人、アイヌ人、北方少数民族だけでなく朝鮮人、ロシア人までもが一緒になって平和な日々を送っていた。ところが、太平洋戦争の終結直前に、突然ソ連軍が、北緯50度を越えて南樺太に攻め入ってきたのである。この切迫した状況の下、日本人のみならず、南樺太に住んでいたアイヌ人や北方民族の人々も必死の思いで北海道へ逃れて来た（その中に、当時はまだ幼子で後に昭和の大横綱となる「大鵬」もいた）。樺太を制圧したソ連軍は、さらに北方四島へと進軍してきた。その結果、日本は大戦後のサンフランシスコ講和条約で樺太を放棄することとなった。

このような歴史を考えると、1,500年前のニヴフ人たちも、同様に他民族との戦いに敗れ、樺太からオホーツクの地へ逃げて来たのかもしれないし、あるいは単に新天地を求めてやってきた開拓者であったのかもしれない。いずれにせよ北海道北部やオホーツク地域と樺太の間には国境もなく、人々は自由に行き来できていた。しかし、ソ連が樺太を侵略して以降、宗谷海峡は閉ざされ、自由往来の許されない海となった。1990年代に入りソ連が崩壊してロシアとなり、日本人がロシアを訪れることも可能となったが、その交流はかつてのように盛んではないのが現状だ。

「知床」は「地の果て」を意味するアイヌ語の「シリエトク」に由来するといわれる。しかし、「シリエトク」の本来の意味は「地の突端」、即ち「岬」だ。アイヌ人にとっては知床もオホーツク地域も決して「地の果て」ではない。今現在、この地域に住んでいる私にとってもここは「地の果て」どころか世界の中心であり、この地の未来が明るく輝くものであることを願う。日本はロシアと国境を接するがゆえに、この難しい国を相手にしなくてはならないが、オホーツク地域がその玄関口として躍進する日が必ず来るはずだ。数百年後、人々がこの地域の歴史を振り返った時、かつては閉ざされた時代もあったのだと驚くだろう。そして、その頃には北方少数民族の末裔たちも共に活躍しているかもしれない。

悠久の時を越えて流れる網走川の向こうには、多くのビルディングが立ち並んでいる。自然と都会が一体化した景観だ。遠い昔、ニヴフの人たちも私と同様に、この場所から川面に輝く太陽の光を眺めていたことだろう。

一瞬、タイムスリップした私は、彼らに声をかける。「君の故郷の樺太と一緒にいかないかい？」と。